

新燃岳噴火から10年 その1

2011年(平成23年)1月26日午後3時40分に新燃岳で約300年振りとなる噴火が発生しました。その後、爆発的噴火も発生し、噴火活動の沈静化が見られなかったことから30日午後11時50分に町では危険区域を対象に避難勧告を発令しました。深夜の避難となり、その日は大変寒い日でしたが対象となった513世帯、1,158人の住民の皆さんは落ち着いて行動され人的な被害が発生することなく避難を終えることができました。

霧島山は活火山であり、特に新燃岳と御鉢では活発な活動が続いています。また、2018年(平成30年)には硫黄山が噴火しました。

各分野で科学が進んでいる現代においても火山の噴火を予知するのはほぼ不可能と言われていています。このことを私たちが実際に感じた衝撃的な火山災害が発生したことがありました。

2014年(平成26年)に長野県と岐阜県の県境に位置する御嶽山で噴火が発生し、この噴火は日本における戦後最悪の火山災害となりました。噴火は9月27日11時52分に発生し、当日は土曜日ということもあり約500人という多くの登山者が噴火に巻き込まれ、火口付近に居合わせた58人が火砕流や火山れきにより死亡しました。

当日、火口付近に居ながら九死に一生を得た女性の登山ガイドの話を伺う機会がありました。この方は「御嶽山の当時の噴火警戒レベルは1であり、誰も噴火が発生するなどは考えていなかった。噴火してからも状況が把握できず立ちすくむ人、噴煙にカメラを向ける人もいた。多くの登山者の中で自分だけは大丈夫との思い込みがあったのではないか。」更に「無事下山することができた登山者へのアンケートによると100人中39人が御嶽山が火山であることを知らなかった。」と証言しています。

自然と共に生きることがいかに厳しいかということを私たち高原町民は新燃岳の噴火を通して体験しました。噴火から10年目を迎え、私たちはこのことを過去のこととして忘れがちになっているかも知れません。しかし、新燃岳では今でも活動が続いており、いつかはまた必ず噴火するという危機意識を持ち続けることが大事なことでないでしょうか。

しかし一方で私たちは、霧島山から多くの恵みを受けながら生活しています。霧島山が無かったとしたら高原町という町は存在していなかったかも知れません。これからも感謝の気持ちと畏敬の念を持ちながら霧島山と付き合いしていきたいと思えます。